

## 特集 私の学生時代 ～第3弾

### 『恩師との思い出』

中村 俊信 （平成2年 農学部卒）



<田中先生と>

私には大学時代に忘れられない恩師がいます。農学部の田中佩刀（たなかはかし）教授です。先生は一般教養の国語を教えておられました。佐藤一斎全集の執筆者の1人で中国古典哲学や陽明学の研究をされておられました（現在明治大学名誉教授）。独特の風貌も相まって多くの学生からは「鬼の田中」と呼ばれ、大変恐れられていました。

大学2年の夏に縁あって田中ゼミに入ることとなり、週一回先生にマンツーマンで2時間程ご教授いただく事となりました。先生は「鬼」とは程遠く、とてもやさしい先生でした。最初は私が持ち込んだ図書に

ついて、予習をしていき先生が手直しされるといった形をとっていましたが、あまりにも私の出来が悪いので、先生が訳して私が書き写す形式になってしまいました。毎回先生から色々な話をしていただき、今思えば本当の授業はこの時で、駄目な私にも解るような例えを用いて、中国古典哲学のエッセンスを教えていただいたように思います。

ゼミは夏休み、冬休み、春休み期間中も行われ、5日以上連続した休みをとったことがありませんでした。「鬼」と呼ばれる先生と二人きりでゼミをしたなんて、他の人とはだいぶ違った学生生活でした。先生との時間は今思えばありがたいの一言です。不詳の「弟子」はついで学問の道は歩けませんで

した。後年、仕事柄生物系の研究報文（仕事の延長として）を書くことがあり、掲載された学術誌を先生に送ったところ「いまだに君が勉強をしていることが嬉しい」とわざわざお電話を頂きました。先生には卒業時に「人間の器は26歳までに決まる。それ以降はその器を埋めていくことになる。どれだけ大きな器をつくれるか、26歳まで一生懸命に努力しなさい」とのお言葉を頂き、一生懸命奮闘したものの、やや小さい器になってしまった感があります。これからも初心忘れず、恩師の教えを大切にしていきたいと思っています。はからずも「私の学生時代」を書くことになり、日常に追われ最近忘れかけていたことを改めて思い出しました。



<先生とゼミの大先輩と>



## 『私の大学時代 — 旅と英語とお芝居と』

熊田 順一 (平成4年 商学部卒)

明治大学校友会西東京地域支部明大 OB・OG の皆さん、こんにちは。熊田順一と申します。明治大学校友会西東京市地域支部の設立準備時から立ち上げの期間会員として参加後、海外に赴任を致しましたのでお休みを頂き、今年度から改めてお仲間に入れて頂きました。よろしくお願い致します。

1987年(昭和62年)に明治大学商学部産業経営学科に入学しました。中高時代はぶらぶらしていたこともあり大学に入ったら割と真面目な倶楽部に入ろうと心に決めていたこと、父から英語はやっておくようにとの言い付けもあり、くわえて女子との出会いもあるだろうという淡い期待もあり(笑)、私は明治大学英語部の門を叩きました。

英語部の1年目の前半でディベート、ディスカッション、ドラマ、スピーチを体験した後、英語で演劇をするドラマセクションに入ることを決めました。3年生の引退まで「ウエストサイド・ストーリー」、「ラマンチャの男」、「ニールサイモンの戯曲」といった素晴らしい戯曲を通して欧米文化に憧れを膨らませ舞台制作に没頭しました。英語部では発音や人前で話す度胸、一度決めたらやり遂げる精神力を学びました。

英語部を3年生の秋で引退した後、欧米文化への憧れと「英語を磨きたい!」という想いは日に日に増し、家族と相談しカナダの首都・オタワへ英語を学ぶため留学することに決めました。オタワでの生活は英語の勉強や保育所やラジオ局、現地での劇団でのボランティア等に明け暮れ、美しい夏と秋が過ぎ、あっという間に冬を迎えました。

寒さに弱い私は「もう日本へ帰ろう」と決めたのですが、観光に携わっていた父・母の影響もあり「普通に帰ってはつまらない」と小さな冒険心を心に抱きました。そこで北半球を一周して日本の自宅を目指すことにしました。1990年12月、オタワが位置するオンタリオ州から2時間バスに乗ってフランス語圏ケベック州のモンリオールからパリへ飛びました。1週間ほどパリで過した後、年内はスペインのマドリッドやバルセロナ・ポルトガルのリスボン・イタリアはフィレンツェ・ベニスを廻りました。面白いもので毎日宿の手配や列車の席を取ったりするので英語がメキメキ話せるようになりました。(自己流英語ですが会話ができる度胸がつかえました(笑)!) 1991年1月年明け後、オーストリア・ウィーンやハンガリーのブダペストを抜け当時のソ連(現在のロシア)へ向かいました。モスクワで一晩過した後、北京に向かう国際列車・シベリア鉄道に乗り込みます。モスクワから確か8日間の旅でした。4ベッドの寝台客室に中国人の方々と一緒に乗り込み、筆談して中国語の発音や基本的な情報を得られたのはその後の中国国内に滞在する私の宝になりました。白樺の林を3日、バイカル湖は半日、どれも日本人の想像力を大きく超えるスケールの自然に取り巻かれて列車は東へ向かいます。列車出発から5日後、モンゴル・ゴビ砂漠の真ん中で休憩停車した際のことです、西に沈む夕陽が私を照らします。私の影は東にグングンと伸びていきます。何もない場所なのですが、西にも東にも遮るものが何もない場所ってなかなか世界にはないのではないのでしょうか(笑)? 中国に入ると万里の長城がお出迎えです。北京に入り、その後1カ月ほど中国国内(成都、西安、昆明、大理、麗江、瑞麗)を旅した後、私は上海から鑑真号というフェリーで3日間かけて大阪に到着しました。カナダでの滞在、そしてヨーロッパからユーラシア大陸を経由して中国に至り、日本海を渡って自宅を目指す旅は地球の大きさ、そして地球は丸く繋がっているのだ、そして各国に住む人たちも皆さん優しいということ実感させてくれました。

帰国後、英語劇で飽き足らなかった私は日本語劇のメンバーに登録し、内野聖陽くんと出逢います。互いに就職の年で、彼は文学座に入所しその後大活躍をしています。私は、「旅のチカラ」に感銘を受けた私は(株)日本交通公社(現：(株)JTB)に就職し、外国からのお客様の日本の旅行をご案内する専門家としての道を歩んでいます。

旅と英語とお芝居に明け暮れた大学5年間がなければ今の私はなかったと言っても過言ではありません。そんな時代をやさしく包み込んでくれた明治大学には心から感謝をしています。そして明治大学校友会の西東京市地域支部の諸先輩・同期・後輩の皆さんとも改めて一緒に何かを始められたらとワクワクしております。今後ともよろしく願いいたします。



## 『私の学生時代』

野中 英彦 (昭和46年 政経学部卒)

昭和42年4月、政経学部経済学科に入学、1・2年は渋谷経由明大前、3・4年はお茶の水まで横須賀の自宅より2時間弱をかけて通っておりました。

我々の入学時は3年後の1970年日米安保条約の改定時期を前に、校内でも学生運動が盛んであり、立て看板の前で安保反対を叫ぶ学生の姿を見て、高校生活との違いを強く感じました。

大学入学の動機も、実業の社会へ出る前の人生のモラトリアム(社会人としての義務と責任の遂行猶予期間)などと勝手に決め込み、広く社会を見たい、部活で何か好きなことをやりたいとの思いが強く、勉強はほとんど頭がないというのが正直なところでした。

入学時は各種サークルへの勧誘活動も盛んで、軽音楽部に当時人気のあったハワイアンバンドで活動したい旨を申し出たところ、生憎こちらは満杯、どうしようかと考えていた際、偶然高校時代の友人と遭遇、英語部に入るといので説明会場について行ったところ、女性も多く、夏には涼しい高原でダンスパーティー付の合宿等楽しい話ばかり、英語にあまり興味はなかったものの友人共々入部、新入部員は東京オリンピック後の英語ブームもあり200人を超えておりましたが、部活動は合宿等もあり時間的制約も多く、活動早々友人を含め次々に退部、3年生でお茶ノ水に移る際は20数人と10分の1程度に減っておりました。

部内にはディベート、ディスカッション、ドラマの3部門があり自分はその時の時事問題を肯定側・否定側に別れて論戦、その内容の優劣を争うディベート部門に所属、英語に関してはあまり熱心な部員とは言い難く、英語力も拙いものでしたが、それでも色々な時事問題について仲間同士賛否両論を通じ見て行くこと、英語ではこんな表現をするのか等色々な勉強をさせてもらいました。

特に思い出深いのは小生が3年生当時、5人一組となって戦う5人制ディベートにおいて‘日米安保条約は廃棄すべし’との課題で論戦、規模の小さな大会ではありましたが、決勝まで勝ち残り、他に優秀な仲間がいたこともあり優勝出来たことです。

元文化放送アナウンサーの落合恵子さんも英語部出身、小生入学と入れ違いで卒業されたので直接面識はありませんでしたが、先輩が開いてくれた優勝祝賀会に顔を出して頂いたこと覚えております。

振り返れば英語部との出会いが有って今の自分が有るような気がしております。



## 『私の学生時代』

小澤 清七 （昭和 36 年 商学部卒）

明大に通学した頃の思い出を書いてみたいと思い、パソコンにて書き染めました。僕は今から 50 年前のことを、記憶を辿り書いてみました。

当時姉に、これからは大学に行かないと男は出世しないと言葉を強く叱られ、家の仕事（時計バンド製作）を継がないと小澤家が消滅するともしつこく言われ、1 年浪人して商学部 2 部に合格しました。昼間は家業の仕事を終え 5 時半に授業が始まるので、夕食を毎日明大の食堂で食べました。当時うどんが 200 円、カレーライスが 300 円だと思いましたが、毎日これしか食べられないので、食事して授業に出向き、確か 4 時間授業で夕方 5 時半から始まり、終わるのは午後 10 時過ぎになる生活でした。

土曜日は授業が 2 時間でしたので、友達と毎週当時新宿にあった（ともしび）という今で言う歌声喫茶店に足を運んだり、当時オデオン座という映画館があり、その上層階にあったスケートリンクに毎回行くのが楽しみでした。それと友達も夜間大学ですから同じように昼間仕事をして通う生徒たちでしたので、まじめな青年ばかりでした。

僕は中学 3 年までいじめられていて、高校 1 年もいじめがあり、つらい通学生活でした。高校 3 年からはクラスが代わり、いじめた生徒とは一諸にならず安心して通学できました。しかし大学ではいじめられず楽しい生活でした。4 年通学も終え無事卒業させていただきました。

今過去を振り返ると、明大に入学したおかげで後に仕事を応援してくれた友人が北海道の販売先を紹介してくださり宝石の販売を始めたのですが、販売先がわからないので友人に相談したところ自分の知ってる得意先を紹介してくださり、そのおかげで販売先が増えて助かりました。しかしバブル崩壊後景気が悪くなり宝石も売れなくなり、札幌に開設した営業所も、当時使用していた責任者に宝石を 500 万円持ち逃げされ、これが原因で会社は倒産し、後に札幌の北税務署から物品税違反で札幌地検に告発されました。その後 4 回くらい事情捜査のため地検に呼び出されて、当時罰金と物品税で合計 400 万円支払えと命令があり、札幌のマンションが差し押さえされて地獄の毎日でした。

そこで弁護士に頼むお金もなく、独学で法律関係の本を買い求め毎日勉強して、法学を勉強していなくとも弁護士に負けにくいくらい自信を持つことができました。そして今日まで数多くの人々を、お金がない人でも無料で相談に応じ助けてまいりました。

こうして現在は自分の裁判で東京地裁にて勝訴の判決が出たので、明大卒業生の方々におかれ法律の問題が出たときには応援させていただきます。

編集者のつぶやき



今回は、特集「私の学生時代－第 3 弾」でした。楽しかった事や辛かった事、そして自分に影響を与えてくれた方、等々…。きっとこのページに書き切れない程の出来事が、次々と心に思い浮かんで来たのではないのでしょうか。

まだ掲載されていない皆様、原稿と写真をお待ちしています。（木村 美栄子）

発行：明治大学校友会 西東京市地域支部 事務局：西東京市谷戸町 3-1-11(水井様方) Tel. 042-421-2164

編集 広報委員会：濱田 豊・木村美栄子・栗田孝行・吉田寿雄